

異世界マンガ作画大賞 課題作品 1 (男子向け)

◆概要

コジマさんと呼ばれる 17 歳の家政婦は、かつて無表情&無愛想だったことから『幻氷の令嬢』と称される御令嬢だった。だが、愛した婚約者が戦死してから環境は一変。次の婚約者や姑から家政婦業を強いられ、挙句「未亡人」と揶揄される羽目に。

だけど現婚約者から『婚約破棄&クビ』を言い渡されて事態は激変する。狼に襲われていた同い年の美少年(聖王子)を助けたことがきっかけで、なぜかコジマさんは貴族の学園生活を再開することになり……。

授業も決闘もダンスパーティーも、全て最強の家政婦能力で乗り切りながら、聖王子にたくさん褒められてどんどん可愛く、幸せになっていくお話です。

◆キャラクター設定

○コジマ

女性、人間、17 歳、家政婦

特徴：辺境の森に住むメイド、無表情&無愛想だったことから『幻氷の令嬢』と称される御令嬢だった。長い前髪やメガネで素顔がわかりにくいですが、二十代半ばくらいの大人びた雰囲気がある(実年齢 17 歳)。好きな家事道具を取り出せるスキルを持っている。

○ディミトリ=スヴェン=バギール

男性、人間、17 歳、王子

特徴：シェノリア学園の生徒であり、『聖王子』と呼ばれるバギール公国の第三王子。灰色の短髪、鮮やかなエメラルドグリーンの瞳。男性のわりに華奢な体格。

◆課題小説(一部シーンを抜粋して、4~8P 程度の完成原稿を仕上げてください)

コジマさんはある光景に遭遇する。行き倒れた少年のまわりに、^{フェンリル}魔狼が六匹取り
囲んでいたのだ。

フェンリル

魔狼とは――言葉の通り、魔物化した狼のことである。

る時などに使うあれである。

「え？」

疑問符をあげたのは、もちろん少年。

フェンリル
だけど、魔狼も根気強く立ち上がる。各々体勢を立て直し、牙を向けてコジマさんに飛びかかるも――

「せめて苦しめないようにしてあげます」

と、コジマさんは一撃一殺。実際に殺してはいないのだが――そう見えるほど、ブォカッ、ヴァカッ、とほうきで的確に叩きのめして行って。あっという間に狼の鎮圧――ならず、“掃除”は完了した。

昏倒する狼らを一瞥して、コジマさんはふうと息を吐く。

「久々に運動しましたね。さて、大丈夫――」

ですか、と、少年の無事を確認しようとした時だった。木々が再びガサガサと揺れたことに、下ろしかけていた剣を再び構え、警戒をあらわにする少年。だけど、コジマさんはその剣をそっと下げさせようとする。

「大丈夫ですよ、ただの子犬なので」

「え、子犬？」

横目を向けてきたつぶらな瞳は、本当に色鮮やかで。顔には出さずコジマさんが可愛らしいと思っていると、それは現れる。

「ええ、私の飼っている子犬……もう子供じゃないかもしれませんがね。でも犬です。少々人懐っこいので注意を――」

その体長、十五メートル。真っ白な体毛の中に、金色の瞳が夕暮れの森の中できらめいていた。黒々とした鼻の下の口元には、ひと噛みで人間など簡単に釘刺しできるだろう鋭い犬歯が覗いている。そんな大きな『子犬』が、コジマさんの注意の途中できゅ～んっと少年に飛びついてきて。

「あら……言うのが遅かったようですね」

ただでさえ傷を負っていった少年は、大狼の下で伸びてしまっていた。

そして、コジマさんは行き倒れ（させてしまった）少年を拾った。

自らの『家政婦小屋』に少年を連れ帰ると、自分のベッドに彼を寝かせる。

ここまでは躰の一貫として『子犬』に運ばせたのだが、彼は成長しすぎたため、せっかくの小屋に入れなくなってしまった。なので、入り口からベッドまで横抱きで運んだのはコジマさん自身である。とても軽かった。

助けた……つもりだったのだが、再び気絶してしまったのなら仕方ない。ペットの不始末の責任を取るのも、飼い主の務めである。

――さて、どうしましょう？

今も少年は、苦しうに ^{うな} 魔 されていた。

とりあえず、身を綺麗にしてあげようと血で汚れた服を脱がす。白い肌だが、意外にも鍛えられているようだ。それでも細身なのは、まあ生まれ持った体質といえよう。腕や足には細かな裂傷がいくつもあつた。だが、脇腹の怪我が一番ひどそうだ。おそらくあの ^{フェンリル} 魔 狼 に噛まれてもしたのだろう。

「なるほど」

コジマさんは無表情のまま、テキパキと怪我の治療を始める。

「う、うう……」

「起きましたね。手足の痺れは？ 身体の動かないところはありませんか？」

「え？」

一晩経って、朝日はとっくに昇っていた。慌てて起き上がろうとする少年の肩をそっと押

し戻し、コジマさんは質問をする。それに少年は目をパチクリさせてから、ゆっくりと手足を動かした。

「痺れているところは……特にはないです。ただ、脇腹が少しひきつるような……」
「それは患部を縫ったから仕方ありません。抜糸するまで一週間ほど我慢してください」
「抜糸っ!？」

少年は慌てて布団を捲って――改めて上半身が裸だったことに気付いたようだ。ズボンも破れていたので取り替えさせてもらった。無表情のコジマさんと包帯の巻かれている自身の身体を見比べてから、彼は気恥ずかしそうに視線を逸らした。

「あの……あなたが治療をしてくれたんですか……？」
「はい。僭越ながら、医学の心得はございましたので、私が裂傷のひどい箇所を縫わせていただきました」
「お医者さんだったんですね」
「いえ、ただのしがない家政婦です」

コジマさんの即座の訂正に、愛想笑いを浮かべ直した少年の表情がこわばる。

「家政婦……さん……？」
「はい、家政婦です」
「でも、医学の心得……」
「洋服を縫うのも、身体を縫うのも大した差はありませんので」

そう言いながら、コジマさんは問題なく話す少年の無事に安堵し、再び自分の作業に戻った。少年の破れた服を直していたのだ。その前に作業台の上に置いてあった写真立てを伏せてから――彼女は目にも止まらぬ早さで背中のスリットを縫い合わせていく。

そんなコジマさんに、少年は慌てて声を発した。

「待ってください！ その部分は縫わなくて大丈夫です!？」
「え？ ですが、このままだと背中が見えて――」
「そういうお洒落なんです!!」
「なる……ほど……？」

シャツだけでなく、すでに修繕済みの彼のブーツも、男性用のはずなのにヒールが付いている。中性的なお顔立ちだが……治療の際拝見した身体は、細身ながらも間違いなく男性の

もの。口調は丁寧なものの、特別女性的嗜好を好む方にも見えないが……。

——都会のお洒落は難しいわ。

ずっと辺境暮らしのコジマさんは無表情のまま小首を傾げて。だけどおそるおそる、少年に用意していた『それ』を見せてみせる。

「では、オプションとしてこちらのうさぎのアプリケなど付けてみたら如何でしょう？ 僭越ながら私が作製いたしました。自画自賛になりますがとても上手に出来たかと——」
「ごめんなさいお心遣いは大変ありがたいのですが、ぜひ・そのまま・お願いしますっ!!」

その力強い拒絶に、コジマさんは少しだけ眉間を寄せて。

——こんなに可愛くできたのに……。

にっこり笑ったうさぎさんのアプリケを引き出しにしまう。



少年の名前はディミトリ＝スヴェン＝バギール。

アスラン領が所属しているシェノン王国の隣にあるバギール公国の第三王子だ。

バギール公国は五年前のシェノンとバギール間のシェバ大戦に敗北して以来、シェノン王国の実質的な属国となっている。そのため王家に名を連ねる者として、ディミトリにも与えられた責務がある。

「俺『聖王子』なんて呼ばれながら、生贄みたいなものでして」

彼はメイドらしき女性が出した白湯を飲みながら苦笑した。

「現在はシェノン王国内の王立シェノリア学園内で生活しています。学園卒業後に、アイーシャ第三王女と結婚する予定となっております」

フェンリル

記憶がおぼろげだが—— 魔 狼 に襲われて倒れていた自分を助けてくれたのが、この女性だった。どうしてこんな辺境の森にメイドが一人で居たのか定かではないが……
どうやらこのあばら屋が、彼女の住まいのようだ。小さく粗野ながらも、埃一つなく綺麗に

管理されているのが一目瞭然。

その中で、丸椅子に座ったままの彼女が「はあ」と相槌を打つ。

——きっと、ワケありの女性なんだろう。

長い前髪やメガネで素顔がわかりにくいだが……きっと年上の女性だ。二十代半ばくらいだろう。戦っている時にチラッと見えた片目がラベンダー色で、綺麗だと思ったのを覚えている。普通なら結婚していてもおかしくない女性が、こんな森の中で一人暮らし……気にはなるが、きっと聞かれない事情があるのだろう。それと同時に、こんな場所で倒れていた自分を警戒だってしているはず。

——優しいひとなんだろうな……。

警戒しつつも、行き倒れていた自分を助けずにはいられなかった——そんな恩人に返せる誠意として、ディミトリは語る。

「今回は学園の実習でこのアスラン領に来てまして。皆で魔術訓練をしていたのですが…

…再戦派の人たちに嵌められてしまったようで。 ^{フェンリル}魔狼に追われる始末に。生贄の俺に何かあれば、バギールが再び叛旗をあげるとでも思っているのでしょう。そんな国力も残ってないんですけどね」

ただディミトリは律儀な少年だった。相手がどのような相手であれ、助けてもらった以上、名無しじゃいけない。自ら名前と身分を明かし、恩にはきちんと礼儀を返す。

だけど、対する彼女はひたすら淡々としていた。

「……それは大変でしたね」

それは同情してくれている時に出る言葉のはずだが、あまりの抑揚のなさにまるで同情されている気がしないディミトリ。

人のことをとやかく言える立場ではないが……。どんなに話しても、彼女の表情はまるで動かず。彼女は最低限しか語らない。一番反応があったとしたら……うさぎのアプリケを否定してしまった時だ。あの時は明らかにシュンとしていた。

だけど……いくら善意とはわかっているものの、さすがにシャツにうさぎのアップリケは困る。たまに女性と揶揄されるような顔つきはしているものの、これでも自分はれっきとした男なんだ！

——ちょっと変わったひとでもあるけれど。
男らしく、恩義にはきちんと礼をしなくては！

「この度は命を助けていただき、ありがとうございます。この御礼はあとで学園に戻り次第、きちんと手配させていただきます」

「ああ。こちらが勝手に助けただけですので、お気になさらず」

まだベッドから動けないながらも、しっかりと頭を下げたディミトリに、やっぱりメイドさん——家政婦さんって言ってたっけ？——は、素っ気なかった。

そして彼女は「そんなことより」と腰をあげた。

「そんなに喋る元気があるなら、何か食べたほうがいいでしょう。王族の方のお口に合うかどうかわかりませんが、善処してみようと思います」

「いえいえいえいえ、そこまでは!？」

見ず知らずの人にそこまでしてもらうわけにはいかない！ 何か礼をすと言っても、自分はただの生贄王子だ。しかもここは他国だし。今は学生の身。お礼といってもせいぜい菓子を手配するなど、できることはたかが知れている。

だけど彼女は慌てるディミトリをよそに、相変わらず淡々としていた。

「申し遅れました。私のことは『コジマさん』とでもお呼びください」

王城のメイドに劣らずのしっかりしたお辞儀に、ディミトリは三回ほどまばたきしてから。彼は「はい？」と首を傾げた。

「その『コジマ』というのは……愛称のようなものでしょうか？」

「そうですね。主人……前までお世話になっていたお屋敷では、皆からそのように呼ばれておりました。幼い頃の坊っちゃんが私の名前を言えず『コジマさん』と呼んでくださったことがきっかけでございます」

「なるほど……ずいぶんと愛着のある呼び名なんですね？」

「はい」

——あ、笑った……!?

本当に、少しだけだが。

無愛想だった彼女の頬が、少しだけ和らいだような気がして。前髪の間隙から見えたラベ
ンダーの目がゆるく弧を描いて。一言だけだが、その「はい」という声音がとても優しくて。

その声をもっと聞きたいと思ってしまったディミトリは質問を重ねる。

「その坊っちゃんやらはお幾つなんですか？」

「今年で八歳になりました。件の『コジマさん』の時はまだ三歳でしたね」

「なるほど。その屋敷にはどのくらい働いていたのですか？」

「そうですね……五年くらいでしょうか。十二歳の時にお世話になりはじめて、今年で十七
になりますので」

「え？」

ディミトリは思わず疑問符をあげてしまうも——己の失言にはすぐ気が付いた。コジマ
さんの目が一瞬細まったからだ。

——俺と、同じ歳……!?

彼女のことを二十代半ばだろうと思っていたディミトリ。女性に対して年齢を間違える
など失礼千万。だけどまだ言っていない。まだセーフだ。

しかし、コジマさんは口角をたしかに上げていた。

「失礼ですが、ディミトリ殿下はお幾つなんでしょう？」

「……十七です」

「同い年ですね」

——あ、バレてる……。

絶対バレてる！ 年上だと思ってたって絶対バレてる!?

わざとらしいニコニコとした口角に、思わず反応が遅れていると、

「同じ年ですね？」

とコジマさんが言い直してくるから。

ディミトリは男らしく「すみませんでした」と頭を下げることにした。